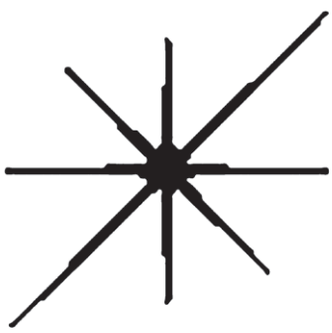
コメット通信 52

［’24 年 11 月号］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

音楽を聴くとき
――ドゥルーズ＝ガタリの音楽論再読に向けて
平田公威――――――――――――3

文学社会学への感謝
――ランソンからサピロへ
関大聡――――――――――――5

ハン・ガンの文学と美術
――歴史と現実への感覚を開く
権祥海――――――――――――8

【追悼　田中淳一】

1971 年の夏あるいは田中淳一先生のこと
朝吹亮二――――――――――――10

規格外の翻訳を生んだ比類なき個性
塩塚秀一郎――――――――――――12

回転扉とイマージュ
郷原佳以――――――――――――14

音楽を聴くとき
――ドゥルーズ＝ガタリの音楽論再読に向けて

平田公威

音楽は孤独を癒す。故郷から遠い，見知らぬ土地の，よそよそしく感じる部屋も，音楽を流せば，気持ちが据わる。ひとりでいることに変わりなくても，心寂しさは満たされる。この窓の眺めも，好きだったあの景色と同じ感じを与えてくれる。たとえば，引越しを歌うキリンジの「この部屋に住む人へ」には，こう思わせるちからがある。かつて住んでいたあの部屋も，どこか寂しいこの部屋も，どちらも「私」というものの一体感を構成している，と。

こうした音楽の力能にかんして，ドゥルーズ＝ガタリは，「領土化」や「脱領土化」などの概念を用い，独自の論を展開している。その議論領域は広大であり，西洋音楽史だけでなく動物行動学や人類学などの成果を取り入れつつ，思想史的には，ニーチェのワーグナー批判と永遠回帰の概念を継承しようとしており，さらには，現代音楽理論とポスト構造主義的な言語学を接続して「半音階的言語学」なる構想まで提示している[(1)]。自然と人間の境界を問いなおし，ある種のニーチェ主義を取りながら，構造主義と対決する音楽論，まさに「フランス現代思想」の結晶である。だが，その核心はシンプルである。音楽は，その度ごとに時空間を満たし，さまざまな事物を整序してくれる。その力能のおかげで，新居は私の部屋になり，私は家具や窓の眺めとのあいだに一体感を得ることができるし，あるいはライヴ会場では，私や他のひとびととのあいだにも一体感が生じるのである。

音楽は異質なものを取りまとめ，「私」や「みんな」の一体感を形成する。このような個体化を論じるにあたり，ドゥルーズ＝ガタリは，20 世紀最大の音楽家ピエール・ブーレーズの「テンポ」と「ノン・テンポ」の区別を援用している。その議論は難解であるが，大筋は次の通りである。ブーレーズによると，ひとは音楽を演奏したり聴取するとき，拍づけて形式化するが，電子的に厳密に計算された音楽のように，人間的な拍づけをもたない「漂う音楽」も存在するという。そして，現代音楽にとって重要なのは，ノン・テンポの音楽によって，人間の演奏と聴取が変化することだという。ノン・テンポの音楽が人間には不可能であるがゆえに，その演奏や聴取において，絶えずテンポは破られて，ひとは「過誤」をやらかすのである[(2)]。この一連の議論を踏まえ，ドゥルーズ＝ガタリは個体化を論じていく。テンポの音楽にみられるように，一定の形式のもと，ひとや事物は固定され，主体が規定されることもあれば，ノン・テンポの音楽にみられるように，純粋な速度からなる機械状の時間において，形式が解けていき，主体化なしに情動が個体化されることもある，と[(3)]。要するに，音楽は奏者や聴者を個体化し，各人の主体性を強化しもすれば，ひとりひとりから情動を解き放ちもするというわけである。

かくして，音楽は孤独を癒す。ひとりでいるときも，みんなでいるときも，音楽は一体感を与えてくれる。だがしかし，そこには危険も潜んでいる。ナチズムのワーグナー利用にみられるような，「音楽の潜在的ファシズム」があるのである[(4)]。そうであれば，街頭では流行歌が流れ，ひとびとはイヤフォンを着けて歩く今日，どのような個体化がなされているのだろうか。「ポップスが放つ音の分子は，いま，いたるところに新しいタイプの民衆を育てていないともかぎらないのだ」[(5)]と，ドゥルーズ＝ガタリは述べていたが，同じことが今も言えるのだろうか[(6)]。今一度，考えなければならない。20 拍子と 21 拍子を移ろう「悪魔」のような音楽を聴き，耳をもつれさせながらもノっている

とき，どのような個体化がなされているのだろうか[7]。音楽を聴くとき，どのような聴衆が生まれているのだろうか。

【注】

(1)　これまであまり注目されてこなかった「半音階的言語学」については，ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『千のプラトー』上巻，宇野邦一＋小沢秋広＋田中敏彦＋豊崎光一＋守中高明訳，河出文庫，2010 年，205 頁を参照されたい。

(2)　ピエール・ブーレーズ『意志と偶然』店村新次訳，法政大学出版局，1977 年，102-106 頁，ならびにピエール・ブーレーズ『ブーレーズ音楽論――徒弟の覚書』船山隆＋笠羽映子訳，晶文社，1982 年，214-218 頁を参照されたい。

(3)　ドゥルーズ＋ガタリ『千のプラトー』中巻，前掲書，210-211 頁を参照されたい。

(4)　同上，381 頁，396 頁を参照されたい。

(5)　同上，391 頁。

(6)　この点については，商業化に伴う音楽と民衆の「疎通」や，それに対する「希少性」を論じるフーコーとブーレーズの対談も参照されたい（ミシェル・フーコー＋ピエール・ブーレーズ「ミシェル・フーコー／ピエール・ブーレーズ――現代音楽と聴衆」松浦寿夫訳，『ミシェル・フーコー　思考集成Ⅸ』蓮實重彦＋渡辺守章監修，筑摩書房，2001 年）。また，ロック音楽とともにリトルネロ概念の威力を示す鈴木泉「リトルネロ／リフの哲学――ドゥルーズ＆ガタリの音楽論に寄せて」『現代思想 2018 年 12 月号　特集＝ドゥルーズ』，青土社，2018 年も参照されたい。

(7)　デジタルに計算された音楽と器楽的な音楽を両立させ，複雑なリズム構成によって規範を撹乱する長谷川白紙の音楽については，その聴取の経験を「身体の再構築の機会」として論じる imdkm「混沌，断絶，グルーヴ――長谷川白紙のリズムの実践を観察する」『ユリイカ 2023 年 12 月号　特集＝長谷川白紙――幻と混沌の音世界へ』，青土社，2023 年を参照されたい。

執筆者について――
平田公威（ひらたきみたけ）　1990 年生まれ。現在，大谷大学文学部哲学科助教。専門＝フランス現代思想。小社刊行の著書には，『ドゥルーズ＝ガタリと私たち――言語表現と生成変化の哲学』（2023 年）が，訳書には，ルイ・イェルムスレウ『新言語学試論』（2024 年）がある。

文学社会学への感謝
——ランソンからサピロへ

関大聡

もう6年も前のことだが，ソルボンヌ大学の博士課程に登録していた筆者は，指導教官のジャン＝フランソワ・ルエットが担当する講義に出席していた。「文学の社会学的アプローチ」と題されたその講義は，ジェルジ・ルカーチ，ピエール・マシュレからナタリー・エニック，ジェローム・メゾにいたる文学社会学の代表的研究者の仕事を紹介するもので，60分という短時間ながら各研究の勘所と「批判するならここだろう」というポイントを的確に指摘してゆく，お手本のような授業だったと記憶している。

その初回に導入されたのがギュスターヴ・ランソンの「文学史と社会学」（1904）だった[(1)]。デュルケームの招請で行われた講演を元にした文章で，「文学史の祖」であるランソンは，自身の方法が社会学的な要請と折り合うものかを検討している。ランソンが確立した文学史についてはアントワーヌ・コンパニョンの『文学史の誕生——ギュスターヴ・ランソンと文学の第三共和政』に詳しいが，講演ではその方法が，源泉（出典）の調査，伝記の作成，後世への影響の研究の3点にまとめられている。いずれの側面を切り取っても，ランソンの文学史は個々の事実（源泉や影響）を拾い上げ，個々の作家（伝記）を取り上げることに専心し，文学作品の個別性を究明する方法であった。それに対して社会学は，個別的なもの（個人）に関心を寄せず，一般的なもの（社会）を研究の対象とするのだから，両者に分業体制はあり得ても，真に手と手を取り合った協力はないのではないか。

そうした疑問を真剣に考慮しながらも，ランソンは一歩を踏み出し，文学作品の社会性を大胆に認める。「どんな文学作品も社会的現象であることを無視することはできない。文学作品は個人的な営為であるが，しかし個人の社会的な営為である。文学作品の根本にある本質的な特徴とは，個人と読者の交流（コミュニカシオン）である。」（「文学史と社会学」）サルトルの『文学とは何か』の一頁を飾っていてもおかしくない，コミュニケーション行為としての文学観がここに見出せよう。テクストのなかに内包された読者や，文学形式の社会性といった先駆的な論点を取り上げながら，ランソンは，みずからの文学史の方法の最重要のポイントが社会学的問題に他ならないことを認めている。

文学作品は社会的なものであるが，同時にそれは個人的なものである——コンパニョンはこの講演を取り上げ，「要するに，文学史は理論のパラドックスの結節点である」と言う。そして同講演を「文学社会学の先駆」と呼ぶ文学社会学者のジゼル・サピロにしてからが，作家がさまざまな源泉（出典）に影響されながらそれを新たな創作へと変形させてゆく過程や，読者が作品を解釈し受容する過程については，それが一種の「ブラックボックス」になっていることを認めざるを得ない（『文学社会学とはなにか』）。創造行為や読書行為にともなう個人的で私秘的な性質——その扉の硬さは，文学作品が文学社会学の方法に示す抵抗であり，文学研究者が社会学的方法に示す抵抗の由来のひとつになっているだろう。

フランスにおいても日本においても，伝統的な文学研究は文学社会学的なアプローチに好意的とは言えないし，批判的な声を耳にすることも稀ではない。そうした反発が制度的な競争関係に根をもつことは，その種の批判を口にする人も，「思想史」という制度的に曖昧な（したがって自称しやすい）方法論は比較的抵抗なく受け入れていることからも窺える。しかし，先に引用したサピロが『文学社

会学とはなにか』の結論で，いささかの自負もこめて「文学社会学は確かな伝統をもっている」と記すように，いまやその研究上の多産な成果は否定できない。「68 年の文学」のような，場の論理と作品の論理が密接に交差する研究領域においても，文学社会学的分析はその有効性を発揮している [(2)]。

もちろん，抵抗や批判に生産性がないとは言わない――コンパニョンの「アンチモダン」研究や，近年のソルボンヌ界隈でよく論じられた「作家の文学史」（文学史家でなく作家自身が思い描く文学史）の研究には，社会学的見地からは見出しがたい視点を発見しようとする意欲が感じられる [(3)]。しかし，文学研究が細分化し，草稿研究も不可欠になり，個別作家の研究の沼がどんどん深くなってゆく近年（そうではないだろうか？），文学社会学がもつ方法論的確信と，その確信のもとで諸研究を蓄積していく協同体制は，好ましく思える。そこから学ぶべきことは多い。

その意味で，ピエール・ブルデューの後継者であるジゼル・サピロの研究が，『文学社会学とはなにか』と数本の論文しか翻訳されておらず，その方法論の実地への応用が見えてこないのは残念なことだ。とはいえ，『作家たちの戦争』（1999），『作家の責任』（2011），『フランスにおける作家と政治』（2018）のいずれも大著であるから，困難な事業なことは理解できる。『作品と作者を切り離すことはできるか』（2020）のように，比較的短く，かつアクチュアリティをもった著作（キャンセルカルチャーを扱っている）のほうが，翻訳には適していよう [(4)]。

筆者がこうした関心を寄せるのは，サルトル研究者としての身分と無関係ではない。作家の社会的地位や政治参加を主な対象とするサピロの研究は，当初からサルトルの仕事に密接に関係しており，数少ない日本語訳テクストも「サルトルとブルデュー」がテーマである [(5)]。そこで彼女は，両者の理論的，制度的な距離を見定めようとしているが，もちろん「サルトルの誤り」を宣言することが問題なのではない。ブルデュー自身が「わたしは，こんにち，サルトルの死と知識人の終焉をあげつらう人々〔……〕の仲間入りをするような真似は絶対にしない」（『自己分析』）と書いたことを知る私たちは，理論の照合に熱をあげても，どちらかに道徳的是非を与えるような愚は犯すまい。むしろ，アニー・エルノー，ディディエ・エリボン，エドゥアール・ルイのような，社会学にも関心を寄せる現代の作家たちのように，サルトルとブルデューの共同の理論的／思想的遺産を，今日に引き継ぐことこそ問題ではないか。

それでは，文学と社会学の協同は実際に可能なのか？　簡単なことではないかもしれない，とりわけ日本におけるフランス研究の領域では至難のことだろう。とはいえ，歴史を遡ってみれば作田啓一の諸研究などは文学社会学の先駆的試みと評せようし，彼の論文「芸術至上主義の論理と心理」は，サルトルの『家の馬鹿息子』に影響されつつ，固有の問題を扱っている（小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』も参照）。こうした遺産の再評価を含め，文学作品という「個人の社会的営為」を考えることを進めてみたい。

【注】

（1）　Gustave Lanson, « L'histoire littéraire et la sociologie », dans *Revue de Métaphysique et de Morale*, XII, 1904, pp. 621-642, repris dans *Essais de méthode de critique et d'histoire littéraire*, textes rassemblés et présentés par Henri Peyre, Paris, Hachette, 1965.

（2）　「68 年の文学」については，その見取り図的な論文を以前に訳出したことがある。ボリス・ゴビーユ「1968 年 5 月－ 6 月の文学的前衛におけるエクリチュールの政治と集団の体制」関大聡訳，『東京都立大学

人文科学研究科人文学報』515 巻，15 号。

（3）　*L'Histoire littéraire des écrivains,* Jean-Louis Jeannelle, Vincent Debaene, Marielle Macé et Michel Murat (dir.), préface d'Antoine Compagnon, Paris, PUF, 2013.

（4）　Gisèle Sapiro, *Peut-on dissocier l'œuvre de l'auteur ?*, Paris, Seuil, 2020. この本については以前紹介したことがある。関大聡「ふらんす時評 16 回　芸術の秋とキャンセル・カルチャー――ロール・ミュラとジゼル・サピロ」『図書新聞』3523 号，2021 年 12 月 11 日。

（5）　ジゼル・サピロ「サルトルとブルデュー――サルトル人間学からハビトゥスの理論へ」石崎晴己訳・解題，『環　歴史・環境・文明』vol.7，藤原書店，2001 年。

執筆者について――

関大聡（せきひろあき）　1988 年生まれ。現在，日本学術振興会特別研究員 PD（立教大学）。専攻＝ 20 世紀フランス文学・思想，特にジャン = ポール・サルトル研究。主な訳書には，『ウエルベック発言集』（共訳，白水社，2022 年）が，主な論文に « Pensée, image et langage. Sartre et Henri Delacroix »（*Études sartriennes XXV*, 2021）がある。

ハン・ガンの文学と美術
――歴史と現実への感覚を開く

権祥海

ハン・ガンの作品に触れ始めたのは，日本でも彼女の名前をよく聞くようになった 2016 年ごろだった。当時，筆者は大学院で修士論文を執筆しながら，日本語だけで読み書きを繰り返すことに疲れ，韓国語の本が恋しくなった時期だった。ハン・ガンの小説は，韓国に帰国する機会があるたびに買ってきて読んだ本の一つである。

韓国近現代史の集団的記憶と向き合う

ハン・ガンのノーベル文学賞受賞のニュースに接し，自分の本棚にある彼女の本 3 冊を久しぶりに取り出してみた。まず，ハン・ガンの名前が世界的に広く知られるきっかけとなった『菜食主義者』（2007）。社会の中の虚無と欠乏を題材に，人間の限界を超えた植物的な生活の姿を見せる主人公と社会の衝突を耽美的に描いたもので，驚くほど新鮮な感覚を覚えた小説である。

そして『少年が来る』（2014）。1980 年，全斗煥を中心とした新軍部勢力が内乱と暴動を起こし，これに抵抗した無実の光州市民が大規模に虐殺された「5.18 民主化運動」をテーマにしている。作品は事件と関連する死者，生き残った人々など，集合的な個人たちの声を立体的に描いた。光州出身のハン・ガンが「圧倒的な痛みを感じながら書いた」と語るこの作品は，膨大な資料をもとに編まれた共同体の記憶のなかに読者を招き，哀悼の感情を引き出す。

最後に『別れを告げない』（2021）。1948 年に李承晩政権下の済州島で起こった島民の蜂起に伴い，李承晩支持派が 1954 年までに起こした一連の島民虐殺「済州島 4.3 事件」に触れている。民間人虐殺，家族の死，残された者の苦しみを繊細な語法で描写しており，哀悼を止めず，決して終わらせないという作家としての意志が「別れを告げない」というタイトルに集約されている。

このように振り返ってみると，ハン・ガンの文学は韓国の現代社会や近現代史における暴力の存在を鋭利に暴いて描いたり，死者の声を再現したりすることに取り組んできたことがわかる。現在日本に住む筆者は，ハン・ガンの小説から韓国社会と歴史の深い部分を直視し，身の回りで起きている同じような暴力や矛盾の状況を改めて考えさせられた。

文学と美術のあいだを往還する独創性

筆者がハン・ガンを知ったきっかけは小説だったが，現代美術のキュレーターという立場として，彼女の美術との関わりについても興味深く見てきた。ハン・ガンは小説家でありながら，執筆や創作活動によって美術への関心を同時に展開してきた。

ハン・ガンは修士論文「李箱の絵画と文学世界」（2013）で，日本統治時代に生きた天才詩人，李箱（1910-37）の絵画作品を分析し，文学との相互関連性を明らかにした。この論文では，一人の創作者が作った絵画と文学作品には共通点があるという仮説のもと，李箱の創作を推し進めた力について論じられている。このような文学と美術の関係をめぐる検証は，小説で絵画的な描写を駆使するハ

ン・ガン自身の作品活動を振り返るものでもあった。

ハン・ガンが 2002 年に見て感銘を受けた在日韓国人の美術家，郭仁植（1919-88）の絵画作品《作品 80-M》（1980）は，翌年発表した小説『黄色い模様の永遠』にオマージュされ，2012 年に出版された同名の短編集の表紙にも使われた。小説では，交通事故で絵を描けなくなった女性の人生が崩壊し始めるが，黄色と青色の点で描かれた Q（郭仁植のイニシャルでもある）の絵画に出会って，創作活動に戻り傷を癒す姿が描かれる。

ハン・ガンは小説を書くこと以外に，美術家としても活動している。2016 年に美術家のチャ・ミヘと二人展を開催し，行為と身体という新たな表現手法を試みた。作品は自分の小説『すべての，白いものたちの』（2016）をもとに, 4 本のパフォーマンスビデオで構成された。その一つである《産着》では，数時間しか生きられずに亡くなった姉のために白い布を縫い，誰も着ることのできない服を作るという行為を通して，消された時間と向き合う。言語化できないものを捉えるために，自分の身体を物事の前に差し出すことで，新たな文学的態度を提示した。

2019 年には「カーネギー・インターナショナル」展に，映画監督のイム・フンスンとの共作《別れを告げない》を発表した。本作は，済州島 4.3 事件をテーマにしており，二人の女性が大きな白い布を持ち，漢拏山から海へゆっくりと移動する旅を記録した約 20 分の映像作品である。ハン･ガンは，この作業を通して以前済州に住んでいた時，あるおばあさんから聞いた生き生きとした証言を思い出すことができたという。作品のタイトルは，2021 年に発表した同名小説につながり，映像の中の一場面は本の表紙にも使われた。

ハン・ガンの文学と美術におけるテキストやイメージ，身振りを鑑賞することは，私たちが歴史や現実と向き合うための複数の感覚に目覚める過程とつながるに違いない。筆者は，彼女の黙々とした実践がまた新たな変奏を作っていく姿に，読者として，観客として参加することを楽しみにしている。

執筆者について――
権祥海（ごんさんへ）　1990 年生まれ。現在，東京都現代美術館学芸員。専攻＝現代美術，舞台芸術。主な企画には，「Stilllive 2024：Kinetic Net」（クリエイティブセンター大阪（CCO），2024 年），論文には，「東アジアにおける歴史実践としてのパフォーマンス」（2022 年）などがある。

【追悼　田中淳一】

1971 年の夏あるいは田中淳一先生のこと

朝吹亮二

1971 年の夏，私は文学部の 1 年生だった。田中淳一先生に誘われて状況劇場『あれからのジョン・シルバー』を観にいった。現在の渋谷パルコのある辺り一体が再開発中の広大な空き地になっていて，そこに紅テントが張られていた。唐十郎はクレーンの上に乗って「この下品な町渋谷で――」のようなことを拡声器でアジっていたし，前座というのかコラボというのかトラックの上では菊地雅章グループが「ダンシング・ミスト」を演奏していた。私は LP『POO-SUN』も聴いていたので嬉しかった。ちょっとした祝祭空間だった。田中先生と靴をかかえてぎゅーぎゅー詰の紅テントに入って李礼仙，根津甚八，大久保鷹，四谷シモン，麿赤児そしてもちろん唐十郎らがほとんど聞き取れないほどの早口，大声でセリフをまくしたて，舞台も客席も関係なく駆けずり回っていたのだった。なかなか衝撃的な体験だった。それよりも少し前に新宿二丁目あたりで，四谷シモンさんとは何回か飲んだことがあり，そのシモンさんが舞台に立つと神々しく光り輝くのに立ち会えたのにも感動した。帰りに餃子とビールをご馳走になり，ランボーや現代詩やフランス文学などいろいろな話をしてくれた。映画の話からだったか田中先生は，マリリン・モンローはかわいいねといったことを話し，私はマレーネ・ディートリヒの方が好きだと言ったら「朝吹クンは大人だねえ」などとからかわれた。

私は入学した 4 月から田中先生のランボーの授業（それは外国語の授業だったのだが）を聴講していた。カミュの翻訳などで知られる高畠正明先生の紹介ではじめて田中先生にお会いした時から，なぜだかいつも会うたびに胸がどきどきしていたので大学に入ると追っかけのように授業を探してもぐりで出ていたのだった。一目惚れのようなものだ。大学のフランス文学者が詩的であることはめったにないが，田中先生だけは特別で，いつも優しく穏やかなしぐさをくずさず，全身から詩のオーラを発していた。

翌 1972 年,『ユリイカ』が 9 月号で「総展望フランス現代詩」を特集し, そのアンソロジーにジャック・ルーボーの『ε』の詩篇が田中先生の訳で掲載された。「さよなら　水みちて　心が言う」と始まる［go］の一篇もそれに含まれていた。本当に抒情的な名訳であり，この一篇の訳詩をもって私のなかの抒情詩の概念は定着した。「抒情詩」と聞くとこの詩が, いや田中先生の訳されたこの訳詩が想起されるのだ。

私が学部の 3 年の時からだったか，フランス文学科の同級生，後に青銅社という出版社を立ち上げた葛西良員や詩人の川村均らと数人で田中先生を囲んでのランボー読書会を発足した。これは世代を超えて断続的に開催されたらしく，10 年近く若い第何次かの「三田詩人」たち，コクトー専門家の笠井裕之氏や詩人杉本徹氏たちも同様に田中先生を囲むランボー読書会に参加していたらしい。まだフランス語もあやしい学部生相手によく付き合ってくれたものだと感心する。その後，田中先生とは高畠正明先生のサロン風のマラルメ読書会でもご一緒させていただいたのも楽しい思い出だ。

私がまだ大学院生だったと思うが，1976 年の 4 月号から田中先生は白水社の『ふらんす』誌に 1 年間「フランス現代詩を読む」という文章を連載された。これは毎号欠かさず愛読，いや熟読した。後に「ふらんす叢書」の一冊として『地球とオレンジ』（白水社，1980 年）という本になる。エリュアール，ブルトンといったシュルレアリストから，ジャック・ルーボー，ミシェル・ドゥギー，アンリ・メショニックに至るまでやさしい「ですます調」で書かれていながら，本格的な詩のテキスト読

解となっていた。この「ふらんす叢書」には名著が多いが，この一冊はまさに私の枕頭の書であり続けている。先のルーボーの詩篇もしかり，エリュアールの一篇のものの見方も今日的だったし，ブルトンの「ひまわり」も詳細に分析されていた。そして，先生は意外なことに（いや決して意外ではないかもしれないが）ルイ・アラゴンの自由詩よりも 12 音綴の定型詩アレクサンドランを高く評価されていて，いつも「朗々としていいよね，職人技だよね」と嬉々として話されていた。アラゴンの訳詩とそのアレクサンドランの解説を読むことができる『アラゴン詩集』（ほるぷ出版，2018 年）も忘れることはできない。

先生は近年では（私は途中参加だったが），笠井裕之氏やミロ専門家の松田健児氏，神奈川県立近代美術館の朝木由香氏と「瀧口修造研究会」を立ち上げ，詳細かつ豪華な『瀧口修造 1958 ――旅する眼差し』（慶應義塾大学出版会, 2005 年）をまとめられ, 進行形の仕事として『瀧口修造 = ジョアン・ミロ往復書簡集』（仮題）を進めているところであった。

そして，最新の仕事としてはジャック・ルーボーの『ジャック・ルーボーの極私的東京案内』ならびに『環』の翻訳があり，後者は第 27 回日仏翻訳文学賞を受賞された。自動翻訳機能を使った文章をさらに翻訳するという難しさや面白さを楽しそうに話されていたのをよく覚えている。この二冊で抒情詩人とはまた別の側面，前衛作家ルーボーの真価であり真髄を知ることができるのだ。

田中淳一先生は私より 10 歳ほど年長だが，いつお会いしても若く，誇張法ではなく私にとってはいつまでも 1971 年夏のままの先生であり続けていたし，あり続けている。

執筆者について――
朝吹亮二（あさぶきりょうじ）　1952 年生まれ。慶應義塾大学名誉教授，詩人。小社刊行の作品に，「曇天および光と矢と槍のためのモノローグ」（『午前四時のブルーⅠ　謎，それは自分』，2018 年）がある。

【追悼　田中淳一】

規格外の翻訳を生んだ比類なき個性

塩塚秀一郎

私にとって田中淳一先生は，なによりもジャック・ルーボーの途方もない訳業によって脳裏に刻まれている。とりわけ，大部の自伝的散文『環』の翻訳には限りない尊崇の念を抱いていた。ところが，30 歳ほど年長の田中先生は私と出身大学も職場も異なっていたため，まことに残念なことにこれまでご尊顔を拝する機会を持てずにいたのである。そんな折，原書にして 580 ページ，重量 600 グラムの大著，『環』の翻訳（二段組み，480 ページ）が，第 27 回小西財団日仏翻訳文学賞（2022 年）を受賞するとの報せを受け取った。受賞式にお邪魔すれば，ついに田中先生にお目にかかれる，と私は期待に胸を膨らませつつ会場に赴いた。だが，すでにその頃，先生は体調を崩しておられ，念願の対面はかなわないまま訃報に接することとなってしまった。

主役不在の受賞式であったが，田中先生を慕う多くの関係者が駆けつけ，温かく和やかな雰囲気の，しみじみと心に残る集いとなった。壇上からお祝いの言葉を述べられたのは，田中先生の教え子の一人で，慶應義塾大学での同僚でもあった笠井裕之さんである。私のように先生の謦咳に接することが出来なかった者にも，そのお人柄が伝わって来る逸話をいくつも披露してくださった。とりわけ印象的だったのは，1980 年代前半に開かれていたという，フランス現代詩の読書会の思い出である。そもそも，笠井さんは田中先生の教室での教え子というわけではなく，参加者 10 人ほどのこぢんまりとした読書会での出会いが，お二人の交流の出発点となったとのこと。私自身も含め，近年の大学教師はやたらに忙しくなってしまい，こうした教室外での学生との触れ合いや別様の教育が難しい環境に置かれているが，改革の狂騒に取り憑かれる以前の大学，特に一般教養のセクションで時に発生していたと聞く牧歌的な学びの共同体には，憧憬の念を抱かずにはいられない。

サン＝ジョン・ペルス，ルヴェルディ，ブルトンなどの詩を読んでいたというその読書会で，田中先生はいつも穏やかに微笑みながら，参加学生の勝手な読みをすべて肯定しつつ，要所要所で作品解釈の鍵となる示唆を与えてくれたという。笠井さんにとって，そんな田中先生の姿は教師の理想像のごとく感じられたとのことである。そうした印象が私にもごく自然に腑に落ちるのは，学生時代に拝読した先生のご著書『地球とオレンジ――フランス現代詩を読む』（白水社，1980 年）の中に，読書会でのお姿を彷彿とさせる文章が散りばめられていたからだ。フィリップ・ジャコテの平明にして新鮮な詩篇を丁寧に解説しつつも，先生はこう釈明するのである。「こうした澄明さの奇蹟のような詩語を前にして既成の尺度や粗暴な対立概念をふりかざし，混濁した言葉で〈解説〉を試みるには，かなり破廉恥な勇気が必要で，できることなら私もただ，〈私の好きな詩人の作品です。読んでみて下さい〉と書いて引込んでしまいたい気持です」。

この読書会は何人もの詩人を輩出したとのことだが，田中先生は教師然として若い詩人たちを育てたというより，年長の詩人としてその成長を見守っているようだったという。翻訳文学賞の受賞対象となったジャック・ルーボー『環』は，質量ともに，詩人・田中淳一が渾身の力で取り組むにふさわしい傑作だ。この書物は，あまりに多様な話題，文体が混然と配置されているため，一般読者からは難解で取っつきにくいと敬遠されがちとも聞き及ぶが，先述のご著書で田中先生がいみじくも述べておられる通り，まったくそんなことはないのである。「ルーボーの作品の多くに共通することですが，

フランス語の構文を無視してイマージュや直情を追ってゆくかぎり，自然，植物群を主要なテーマとするみずみずしい感覚や素直な抒情がそのまま伝わってきて，難解な現代詩に辟易する読者にも新鮮な詩の息吹を感じとらせてくれます」。実際，『環』の冒頭では，真っ暗な冬闇の窓ガラスに霜が形作る一輪の花のイマージュが美しく展開され，幼年期の数々の思い出がここから分岐するとともに，語り手はたえずこのガラス窓のイマージュへと回帰するのである。

もっとも，美しいイマージュを起点とする追憶の書，というだけであれば，なにも田中先生でなくとも，フランス語を解する詩人なら翻訳に困難は覚えなかっただろう。だが，『環』は想像を絶するまでに雑多な書物であり，あらゆる種類の文章を受け入れるための「器」とすら感じられるのだ。さまざまな文学ジャンルと戯れつつ，未来の作品の計画，いまだ存在しないテクストの草稿，現在の日記といったものが，挿入と分岐を通じて増殖してゆく。時に哲学や数学にまでおよぶ話題は読むだけでも難儀なのに，一字一句ゆるがせにせず翻訳するのは大変な苦労だっただろう。田中先生の比類なき個性をもってしてこそ，この規格外の書物と互角に渡り合えたのだと思う。慶應義塾大学にアーカイヴ「瀧口修造コレクション」が発足した際には，年長教員の発した「本学で一番瀧口に似ているのは田中淳一だ」とのひと言によって，田中先生が責任者に任じられたとのこと。ジャンルを超えた幅広い知的好奇心と，豊かで繊細な詩的感受性，その両者の奇跡的な融合こそが，大作『環』の日本語訳に結実したのである。後学の一人として，田中先生の御霊に深く感謝申し上げたい。

執筆者について——
塩塚秀一郎（しおつかしゅういちろう）　1970 年生まれ。現在，東京大学大学院人文社会系研究科教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の主な著書には，『シャルル・フーリエの新世界』（共著，2024 年）が，訳書には，レーモン・クノー『リモンの子供たち』（2012 年），マルセル・ベナブー『私はなぜ自分の本を一冊も書かなかったのか』（2024 年）などがある。

【追悼　田中淳一】

回転扉とイマージュ

郷原佳以

「地球とオレンジ」を超える喚起力をもった書名に出会ったことがない。そもそも，背表紙に「地球とオレンジ」と書かれていなかったならば，10 代の頃，母の書棚から一冊の白い本を抜き出すこともなかっただろう。地球とオレンジ？　いったい何の本だろう，地球とオレンジにいったい何の関係があるのだろう, 丸い（球形）という共通項？　と手にとって開いてみると, いや, 共通なのは「青い」ことだと，著者の田中淳一氏は言うのだった（白水社，1980 年）。もちろん，巻頭に著者の翻訳で載っているポール・エリュアールの詩（『愛・詩』）の一節,「大地はオレンジのように青い／間違いなものか　言葉に嘘はない」に基づいているのだが, しかし,「大地とオレンジ」という書名だったならば, 私は手に取っただろうか。「と」が並列する二項の隔たりから生まれる驚異が，それでは，足りない。

La terre は「大地」でもあり「地球」でもある。「地球とオレンジ」という書名が生まれたのは，田中氏がこの詩句を「読み返す」とき，人類最初の宇宙飛行士ガガーリンの「地球は青かった」という言葉を思い出すからである。1929 年には書かれていたこの詩を最初に読んだとき，自分はすでにガガーリンの 1961 年の言葉を知っていただろうか，と著者は自問する。定かではないが，おそらくそうなのだろう，と曖昧な記憶からとりあえず結論づける。エリュアールにとってではなく，1961 年以後にこの詩を読む者，あるいは「読み返す」者にとって，先の一節は,「地球は青かった」と「ぬきさしならぬ」つながりを結ぶようになったのだ。いやしかし，と著者は考え直す。この la terre は，ガガーリン以前は「大地」，ガガーリン以後は「地球」，というような「単純な割切り方」では捉えられないのではないか。「のように」という直喩で結ばれた la terre と「オレンジ」が,「地球はオレンジのように丸い」とか「大地はオレンジのような色をしている」といったばかばかしくも平板な比喩を読者に暗に直感させた上で，その「一種の共犯関係のうちに」,「青い」の一語によって「青い地球」と「丸いオレンジ」を「形態」と「色彩」の両面にわたり接近させるという「曲芸的な逆説」を実現するとき，その一文は,「とほうもない喚起力を帯びはじめ」る。

ゆっくり見てみよう。まず逆説は，青色とオレンジ色という補色が,「青い大地がオレンジ（色）のようである」と結びつけられることにより極まり，それと同時に，補色同士が混合されることで色彩が相殺され，今度はそこから，オレンジが色ではなく果実の形態として姿を現す。すると,「この視像の逆作用をうけて今度は la terre の像が自在に変貌しはじめ」る。というのも，la terre という語にはもともと「足許の土くれ，平らな大地，丸い地球というふうに形態の上ではさまざまな変化をうけいれる素地がそなわっている」ため，最初，オレンジ色との対照によって，青みを帯びた大地として現れかけ，そして相殺によって消えていった視像が，次にはオレンジとの類比において青い地球として戻ってくる，ということが起こるからだ。そのことを著者は,「「のように」を軸とする回転扉が一回転するごとに, 主語の la terre が異なった相を示すという, 奇妙にねじれた回帰運動の軌道を描く」と言い表している。『地球とオレンジ』第 1 章が「比喩の宇宙軌道」と題されている所以である。「のように」という，一見すると説明的で詩的興趣を欠く――「大地は一箇の青いオレンジだ」という鮮烈な断言との対比を見よ――接続詞が，しかし，比喩されるものの比喩するものとの意想外の衝突によって壮大な回転運動を引き起こしうることを，私はそのとき知った。

フランスの現代詩人に一人一人照明を当て，原文と訳詩を載せて丁寧に解説してゆくこの『地球とオレンジ』には――月刊誌『ふらんす』の連載を元にしている――，18 人目にミシェル・ドゥギーも取り上げられていて，詩人が「連想の筋道」を「すべて裏返しに」し，「青が汚点のように飲む／雲の白いインクを」といった一節を含む詩に「おお世界の大いなる接合」という題を付して平然としている様が浮き彫りにされているが，しかし，あの時はまだ，18 章まで辿り着かずに本を戻したように思う。後に，大学 3 年生の頃，19 章で取り上げられている詩人にして詩論家のアンリ・メショニックが来日し，その集中講義でエリュアールの『愛・詩』が扱われたとき，もう一度この本を取り出したのではなかっただろうか。ともあれ, あのとき私の頭にはただ,「大地はオレンジのように青い」という一節と，回転装置によって生み出された「オレンジのように青い地球」のイマージュが棲みついた。と同時に，イマージュは固定したものではないこと，回転扉で次々に異なる相を見せ続けるものであることを覚えた。それが，まだ「研究」などという道もよく知らなかった頃の，田中淳一という名前との出会いだった。後に，フランスに留学してから「イマージュ」という何だかよくわからないものを博士論文のテーマにすることになったが，そのきっかけがここにあったのではないかと，いまでは思っている。

次に田中淳一の名前と出会ったのは，モーリス・ブランショという作家に関心を持ち始め，その小説『白日の狂気』の翻訳書を手に入れたときだった。1985 年に朝日出版社から刊行されていた，表題のみならず装幀も恐ろしいその書物は，こんなふうに始まっていた。「わたしは物識りでもなく無知でもない。わたしはさまざまな歓びを知った。それでは言い足りない」。この一節は後に繰り返される。語り手は何が起こったのかを正確に話すように言われ, 語り出す。「物語？　わたしははじめた。わたしは物識りでもなく, 無知でもない。わたしはさまざまな歓びを知った。それでは言い足りない」。しかし，彼の語りは受け入れられず，この物語は次のような宣言と共に幕を閉じる。「物語？　いや，物語はなしだ, もう二度と決して」。これらの言葉もまた, 私の頭の中で響き続けることになった。以後，ブランショを研究することになった自分にとって，田中淳一は長いあいだ，ブランショやマラルメの数々のテクストの信頼できる翻訳者の名であった。そこからまたしばらく経って，おそらく初めてリアルタイムのお仕事として，ウリポの詩人ジャック・ルーボーの『ジャック・ルーボーの極私的東京案内』，さらには大著『環』の翻訳に感嘆をもって触れたとき，柔軟で洒脱な『地球とオレンジ』が思い出された。

田中淳一氏にはもっとたくさんのご著書，ご翻訳書があるが，面識があるわけではなく，もっぱら恩恵に浴してきた一読者として，個人的な関わりでのみ言及させていただいた。言葉が生み出す「イマージュ」の燦めきを教えてくださったことに深く感謝し，ご冥福をお祈りいたします。

執筆者について――
郷原佳以（ごうはらかい）　1975 年生まれ。現在，東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の主な著書には，『言語の中動態，思考の中動態』（共著，2022 年），訳書には，ブリュノ・クレマン『垂直の声』（2016 年），モーリス・ブランショ『文学時評 1941-1944』（共訳，2021 年）などがある。

水声社の新刊

（2024 / 11 / 29）

【12 月の新刊（予定）】

バルザック『あら皮』研究

――ダンテとラブレーから読み解く複合的構想

吉野内美恵子　　【12.6 発売】

▶ダンテとラブレーの精読を経て、悪魔に魂を売った破滅の物語『あら皮』は、罪の浄化というもう一つの物語に反転する――「風俗研究」と「哲学的研究」の架橋をもくろむバルザックの広大な構想が明らかに。

A5 判上製／ 256 頁／ 4000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0844-1

〈現実〉論序説

――フィクションとは何か？　イメージとは何か？

塚本昌則＋鈴木雅雄編　　【12.12 発売】

▶人文学のラディカルな再編のさなか、イメージと言語、身体と表象の関係を再定義する、16 名の倦むことなき横断的思考。人文知の地勢図を描きなおし、来たるべき〈現実〉論への途を示す前人未到の試み。

A5 判上製／ 512 頁／ 7000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0836-6

マヤ・デレン――眼差しは何を見ていたのか　《水声文庫》

石井達朗　　【12.17 発売】

▶トロツキスト、ダンサー、実験映画作家、ヴードゥーの研究者にしてその根っからの信奉者……現実と夢幻のはざまを鏡像のようにゆらめく激しい生のなかで、何を見つめ、何を求めていたのか。代表作『午後の網目』から人類学的な著作『聖なる騎手たち』までを含む全作品を網羅し、知られざる全貌を明らかにする。

46 判上製／ 298 頁／ 3000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0837-3

点描の美術史――印象派から現代アートまで

加藤有希子 【12.17 発売】

▶世界を断片化する多焦点の表象――点描。鮮やかな色片に秘められた近現代の暴力性を、ダイナミックに描き出す。モネ／スーラ／ゴッホ／セザンヌ／マティス／ピカソ／ポロック／リキテンスタイン／ハースト／草間彌生……

46 判並製／ 250 頁＋カラー別丁 8 頁／ 2500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0831-1

コリーヌ　あるいはイタリア

スタール夫人　佐藤夏生訳 【12.27 発売】

▶桂冠詩人コリーヌは恋人の英国軍人オズワルドとともに、ローマ、ナポリ、遠くヴェネツィアまでも旅する。硬直した社会と、祖国への義務に阻まれ揺れ動く恋と苦悩を描く傑作小説。

A5 判上製／ 453 頁／ 5000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0845-8

グリルパルツァー戯曲選　リブッサ／夢は人生

城田千鶴子訳 【12.27 発売】

▶ 19 世紀オーストリアの最高の劇作家と評される著者の代表作。死を前にして現世の愛を超越し、天命を取り戻す領主の娘をめぐる本邦初訳の悲劇「リブッサ」、古代ペルシャで王になりあがろうとした男の野望と挫折を描くメルヘン劇「夢は人生」の 2 篇を収録。

46 判上製／ 335 頁／ 4000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0834-2

スペイン文明論集 I ［文学・言語篇］

アメリコ・カストロ　本田誠二編訳 【12.27 発売】

▶ 20 世紀スペイン屈指の歴史家＝文芸批評家が、西欧文明とイスラーム文明の狭間で育まれた特異な〈スペイン性〉の輝きを、セルバンテス、ロペ・デ・ベーガ、サンタ・テレーサをはじめとする黄金世紀文学や神秘主義的著作の精読を通じて描き出す。

A5 判上製／ 689 頁／ 10000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0842-7

スペイン文明論集 II ［歴史・文化篇］

アメリコ・カストロ　本田誠二編訳　【12.27 発売】

▶〈衰退するスペイン〉への危機意識のもと、スペイン民族の核心を把握し直すべく、キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒の共存と対立の中で編まれたスペインの歴史を再考し、独自の視点からレコンキスタ、サンティアゴ信仰、異端審問を論じる。

A5 判上製／ 700 頁／ 10000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0843-4

エリック・ロメール――ある映画作家の生涯

アントワーヌ・ド・ベック＋ノエル・エルプ
坂巻康司＋寺本成彦＋寺本弘子＋永田道弘訳　【12.27 発売】

▶映画作家と教師、批評家と小説家、リアリズムと夢想、ロメールとシェレール……同時に二つであろうとした、ヌーヴェル・ヴァーグの旗手の特異なる生。批評、書簡、証言、未刊行資料を縦横に結び、ロメールを現代に解き放つ初の本格評伝。

A5 判上製／ 744 頁＋別丁カラー16 頁／ 10000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0826-7

書影準備中

【11 月の新刊（既刊）**】**

歌、燃えあがる炎のために

《フィクションの楽しみ》

フアン・ガブリエル・バスケス　久野量一訳　【11.4 発売】

▶こぼれ落ちた記憶に息吹をあたえ、物語を歌いあげる九つの短篇――忘却された真実を捉える写真、愛憎極まった読者からの手紙、匿名の暴力に晒される失踪劇、理由なき殺人を生き延びた男の撮る映画、伝説的ヴォーカリストの最後の録音、自由を求めて生きた女性の評伝……。

46 判上製／ 272 頁／ 3000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0833-5

ピランデッロ戯曲集 III

——どうしてそうなったのか分からない／山の巨人たち

斎藤泰弘編訳　【11.4 発売】

▶無意識に犯した罪におののき、自罰の欲求から破滅の道へと進む心理劇『どうしてそうなったのか分からない』、落ちぶれた劇団《伯爵夫人一座》の受難を描き、ファシスト政権の芸術蔑視を風刺する未完の遺作『山の巨人たち』の 2 作品を収録。20 世紀最大の劇作家の戯曲集、全 3 巻完結！

A5 判上製／ 296 頁／ 4000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0830-4

ブリュヌチエール

——ある反ドレフュス派知識人の肖像　《言語の政治》

アントワーヌ・コンパニョン　今井勉訳　【11.4 発売】

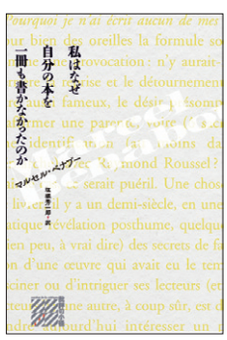
▶ドレフュス事件による激震のさなかにあった世紀転換期フランス。今日の文学理論の泰斗が、忘れ去られた保守派の批評家ブリュヌチエールを歴史の舞台に上げる。一人の知識人の著作や書簡をプリズムとして、危機の時代における文芸・宗教・政治の交錯を活写するミクロ・ヒストリー。

A5 判上製／ 400 頁／ 6000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0827-4

私はなぜ自分の本を一冊も書かなかったのか

《批評の小径》

マルセル・ベナブー　塩塚秀一郎訳　【11.8 発売】



▶ペレック、カルヴィーノと並ぶ、実験文学集団「ウリポ」の旗手が放つ問題作。エッセー、思索、批評、言い訳、剽窃——そのすべてを織り交ぜながら、〈私〉の作品を書くことを繰り延べつづける。「書くことの困難」をめぐる真面目さと滑稽さ。

46 判上製／ 200 頁／ 2500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0783-3

今井祝雄――長い未来をひきつれて

芦屋市立美術博物館編　【11.15 発売】

▶最年少会員として参加した「具体」での活動から、ものと人間の関係への問い、映像・写真というメディアへの取り組みなど、今井祝雄の 60 年にわたる多彩な活動を紹介し、その活動の軌跡を明らかにする、芦屋での展覧会の公式図録。

A5 判並製／120 頁＋別丁カラー 24 頁／3000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0832-8

マルグリット・ド・ヴァロワ

――一人の女性の物語、一つの神話の歴史

エリアーヌ・ヴィエノ　鍛治義弘訳　【11.27 発売】

▶兄弟との恋愛関係、退廃した生活、政敵の暗殺……悪女〈マルゴ〉のイメージをヴァロワ朝最後の王妃から払拭する、最新の研究成果。王妃の回想録、書簡、後世の歴史家たちの著作を精査し、〈マルゴ伝説〉誕生の経緯と神話の裏に隠された彼女の実像を明らかにする。

A5 判上製／ 446 頁／ 6000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0818-2

君自身のアートへ

小林康夫　【11.30 発売】

▶苛烈なカタストロフィーの時代のただ中にあって、今、〈アーティスト〉であることに何の意味があるのか？　半世紀にわたってアートと並走した哲学者が贈る、過激な挑発！

46 判並製／ 172 頁／ 1800 円＋税　ISBN：978-4-8010-0835-9

水声社

東京都文京区小石川 2-7-5　tel. 03-3818-6040 ／ fax. 03-3818-2437　eigyo-bu@suiseisha.net

ブックカフェ

本の庭
le Jardin des livres

本の庭

移ろいゆく季節を感じながら，緑と本に囲まれて，憩いのひとときをお過ごしいただけるように，都内でもまだ緑の多く残る山王にブックカフェを開き 11 月 15 日で一周年を迎えました。店内には水声社の本を展示販売しており，新刊は本屋さんの店頭に並ぶより，10 日から 1 週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに，パニーニやスコーンなど，店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食を。また，焼菓子や各種スィーツは，窓辺の景色とともに季節を感じていただけるように，シーズンごとに展開しています。

Instagram もご覧ください。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1 － 22 － 16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅　山王北口より徒歩 7 分

営業時間：11:00 ～ 18:00

営業日：木・金・土・日（詳しくは Instagram をご確認ください。）12 月 27 日（金）は貸し切り営業のため，営業は 15 時までとなります。年内は 27 日が最終営業日です。

℡：070 － 4171 － 0860

店内設備：スロープを設置できますので，車椅子のままご入店いただけます

Free Wi-Fi

本の庭
le Jardin des livres

（広告）